昔がたり（一）

あざみ

昔がたりでもいたしませうとお約束をいたしましたね、何昔がたりは年よりのするものだと仰るのですか、エエ〳〵としよりですとも。もうぢきに日向の座布團でも持ち出してドッコイショと座りこみ、せなかをおでこにして水牛椽の目鏡か何かかけて、何を食べてゐるのでもないのに口をモグモグさせながら、草ざうしなど出來るだけとほくはなしてよむ樣になります。さて二昔もまへの某年某月某日の入學試驗から、この昔話に移ります。

唱歌試驗、十人ばかり心は同じビク〳〵ドキ〳〵しながら試驗室へはいる、まづ一人の先生がオルガンの前に腰をかけ、男女の大勢の先生がゐならんでゐるのが目に入る。黒板があつて其前に唱歌の掛圖がたつてゐる。オルガンの前の先生は順々に唱歌を知つてゐるかときく、知つてゐれば掛圖の中から自分の好きなのを選んで唱へといはれる、もし知らなければ讃美歌はときかれる、讃美歌のみを知つてゐるものはオルガンも何もなしに、たよりなささうなかほをしながら

あふるゝめぐみの泉なる主よ

などうたひ出す。ある人は唱歌も讃美歌も知らないといふので、先生が此通りの聲を出して御覧なさいといつて、オルガンで或る音をひく、と其人が大きな聲をだしてブーといつた、なみ居る先生達はをかしさに下を向く、オルガンの先生はすましてアーと云ふのですとをしへる。

それから一寸した聽音がある、これもやはりまち〳〵な答である。先生のオルガンをきいて１３５とか、１４６とか答へる人もあれば、音が三つあつてはじめのが一番ふとく、中のがいゝ加減で、三番目のが一番ほそいなどゝ云ふ人もある。そんなことをして二十何人かゞ試驗生として入學を許された、それから一週間毎位に試驗があつてはおひ〳〵にはじき

出されて八人になつた。

教場ではよく笑つて叱られた。何がをかしいともなく一人が笑ひ出すとすぐに皆に傳染する。一人で唱ふをりなど心配である筈だのに、アの音で長い譜をうたふとよく途中でをかしくなつてアワワワワ、、、なんど、なつてしまう、唱歌集は「かをれにほへ」から習つた。

一週に一度修身の講義があつたのは今と同じである。この時には校中の先生が不殘出席した。或時此時間を利用して、先生が皆の發音をためす事となつた。まづ一人〳〵アイウエオと云はした、口の形も何も、かへずに出來るだけ早口にアイウエオと云つてしまつて叱られるのもあるし、目がひきつれてあごがガクンと云ふほど大きな口をあいてアーと云つてほめられるのもあつた。結局口のあけ工合は 口の 大さに比例することゝきまつて、一々先生から口の寸法をとつてもらつた。そしてどう云ふ割合だかしらないがこれだけの口の人はアの時はこれだけあける、イの時にはこれだけあけると云つた風にめいめい寸法書をもらつた。昼休みにみんなで庭へ出て山吹を折つて心(しん)を出してアの寸法やイの寸法をこしらへた。そして楊子で中ほどを刺して撞木形としてこれを上齒と下齒の間へ入れ、アだの、イだの、といつて練習をした、次の時間に、その山吹や練習の結果を先生に見せた。（中にはあなたの口でこんな小さな山吹の筈はありません、などといはれた人もある、但し私ではない）

ピアノはバイエルのはじめから習つた。練習時間には、三人位づつピアノに向つててんでにちがつたものをさらつた、先生が見廻つて來てそんなにゴチャ〳〵一度にひいては、いけない一人づゝかはり合つて、おさらひなさいといつた、なるほどさうするのかと、はじめて知つた。

先生が、二つでも三つでもこれだけさらつて、來いといふとすぐに、目を白黒させてさらつた。やつとヨチ〳〵ひける樣になると、すぐに、 運動場へ出て鬼ごつこをしたり、赤とんぼをおひかけたりした。生徒掛か書記さんか?ある時、出て來て、「アーチャガチャ(あなた方といふ事のよし)はそんなにあばれてばかりいると校長さんにいひつけますよといつた、いひつけられては、こはいから、みんなで少し大人しくした。

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本：東京音楽學校學友会「音樂」第二巻第五号
　　明治四十四(1911)年五月十日発行
筆名：あざみ
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年十月二十八日

橘糸重【散文作品集】に戻る。